

# 山と博物館

第49巻 第4号 2004年4月25日

市立大町山岳博物館



## フクジュソウ(長野県準絶滅危惧)

文・写真 千葉 悟 志

博物館では、ここ数年、絶滅危惧植物を対象に生活史や生物との関わりについて観察を行ってきました。ここではフクジュソウについて、触れてみましょう。

調査地である北安曇郡白馬村にある姫川源流では、四月中旬から五月上旬にかけて遊歩道沿いにフクジュソウの花を楽しむことができます。

花は、開閉花で太陽光が当たると開花し、木々で太陽光がさげられたり、天気の良い曇りや雨、雪などのときには閉花した状態になります。この花はパラボランテナのようになっています。太陽光を正面から受けるように植物体の角度を変化させます。この向日性によって、花の中心温度を外気より高く保つことができます。

なぜなのでしょう？

この理由には、昆虫との関係、受精を助ける関係、瘦果(そうか)の成長との関係があるといわれています。花の寿命はおおよそ十日で、果実(集合果)は五月下旬から六月上旬に完熟します。集合果のひとつ一つを瘦果と言います。なかには黒色の種子が入っています。

年内に発芽することはなく、種子はこのとき休眠状態にあって、発芽には低温にさらされる必要があります。

初夏になると熟した瘦果はバラバラになって、地面に落下します。落下した瘦果は地面に残っているものもあれば、アリによって巣に運び込まれるものもありました。

フクジュソウの群落が広がるには長い時間を要することが伺えます。

## 大町登山案内者組合のはじまり(後)

## 関 悟 志

## (2)大町登山案内者組合の設立

大町登山案内者組合は大正六年(一九一七)六月、百瀬慎太郎が主唱して大町に設立された。設立時の組合員は二名であった。これは日本における近代の登山において画期的な出来事であった。すなわち、富士山で登拝者を先導した先達や荷物を運び上げる強力、あるいは立山や白山で登拝者の荷を一部背負いながら先導した中語と呼ばれた同行者たちの集団とは一線を隔すものであったといえる。

## ①「山岳」からみる設立前後

明治三十九年(一九〇六)六月発行の『山岳』(註15)の「雑録」欄に小島鳥水(本名久太)が「登山の導者養成に就きて」と題して文章を寄せている。ここで鳥水は当時の日本における山案内人について「いづれもアルプスの荷擔ぎ」程度で、それと「實は覺束ない、山の名を聞けば知らぬ、辛ければ直ぐ下山する」と言ひ出す。その資質の低さを嘆き、ヨーロッパの本場アルプスにおける「ガイド」誕生の経緯、さらにその職業としての質の高さについて述べている。一方、次のようにも記している。「好案内者が出なくては、登山術が発達しない、是に於て登山者養成の途を講じなくてはならぬ。然れども卑見を以てすれば、案内者の如きは、抑も末なり、要は、好個の登山者を作るに在るのみ、登山客と立派な人が行くようになれば、自然に伴う案内者も感化されるものである(中略)日本に純然たる「職業としての案内者」が出来ないのは、一、二の山岳を除いて、一般に登山者が少ないためだ。のと、登山者それ自身が、何々講といふ類の、無知にかけては、案内者に劣らぬ道客輩多きを占めてゐるためである」

それから間をおいた大正四年(一九一五)九月発行

の『山岳』(註15)「会報」欄に「登山案内者改善の一方」と題した文章が掲載された。創立から十周年を迎えた日本山岳会では「登山案内者の不良、賃金の不廉、高低定りなき事等」といった会員登山者の山案内人に対する苦情を改善する方法として「登山案内者手帖」を製作して一定の基準に達したと認める山案内人に無料配布する事業を考え、翌年の登山期までに普及させようと計画したようである。ここでは十六項目からなる「日本山岳会」登山案内者手帖「規定」が掲載されたほか、「本手帖の形式、交附者等は次號以降に記載すべし」とある。

これに続いて、大正四年十二月発行の『山岳』(註16)「雑録」欄に「ガイドの事」と題した百瀬慎太郎の文章が掲載された。これは慎太郎が返信(日本山岳会幹事の誰かへ宛てたものか)した私信と思われる。掲載文章の末には「大正四、七、十八、百瀬慎太郎」とある。この中で慎太郎は「兎に角此度の御思立は非常に面白い事と思ひますし、私も常々その様な考がありましたので、それが會の方からやつて頂く事になると此上ない嬉しい事に存じます」と記し、手帖の配布に賛成する姿勢を見せている。一方、地元大町周辺の登山状況と山案内人の能力の実情を述べた上、現状で手帖を渡すに足る大町の山案内人は三名位であるとして、その名前を挙げてゐる。さらに「ガイドの手帖については山人達が私達の心持に共鳴しない点がある為多少の困難があると思ひますが、私の決心はなるべく、大町地方の案内者を理想に近く養成したいと思つてゐます」と伝えている。大町登山案内者組合設立以前から、当然ながら慎太郎は対山館の宿泊客に乞われれば、登山支度を調達するとともに信頼に足る案内人を紹介していたであろう。

これは対山館には先代の百瀬金吾のころから山案内人調達の実績があり、慎太郎自身も山案内人たちと山行を共にし、その力量を把握していたということである。大正時代に入って登山に関わる環境が整いはじめると登山者は増加し、山案内人の需要も高まる。しかし、北アルプス北部周辺の山域を網羅する案内能力が備わった大町の山案内人は限られており、もはやその需要と供給の均衡はくずれ、慎太郎は山案内人数の確保と彼らの案内能力向上の必要性が急務であると感じていたと思われる。

その後、大正七年二月発行の『山岳』(註17)「雑録」欄に「大町登山案内者組合の設立」と題した文章が掲載される。ここで大正六年の夏から大町で百瀬慎太郎が登山案内者組合を設立したことが紹介され、「日本に於て唯一にして最初なる登山案内者組合は斯くて生れたり、吾人は百瀬氏の此舉を滿腔の喜びと同情を以て迎ふるものなり」と述べられている(た、た、)とあることから日本山岳会発起人のひとりである高野鷹蔵による記述と思われる。また、ここでは十八項目からなる「規約」(規約の末には「大正六年六月 大町登山案内者組合」とある)も掲載された。大正七年十二月発行の『山岳』(註18)「雑録」欄に「登山案内者(一)」と題した文が掲載された。これは次のような目的からである。「本欄は登山案内者手帖」を交附するの前提として設けたり、識者の一考を得たし。ここでは、百瀬慎太郎発信による高野鷹蔵宛の私信(大正六年十一月二十九日記)が掲載された。また先の『山岳』に掲載された大町登山案内者組合の「規約」について、一期通した組合活動の経緯から考えを述べた上で、この「規約」から抹消・訂正・追補すべきことなどを含めて意見を求めている。このことから慎太郎が当初掲げた組合の「規約」は、試行的な部分が含まれる案であったことがうかがえる。ここでは当時の加入者二名の名前を挙げ、さらに十三項目からなる「心得」を記している。この「心得」は慎太郎いわく、組合の会合の席で加入者に口頭で注意し

たような事柄であり「公表すべきものではなく、たゞ我々同志の誠め」であるとしている。

これに続いて、大正八年四月発行の『山岳』(註19)第十三号第二号(日本山岳会)「雑録」欄に「登山案内者(二)」と題した続編が掲載された。ここでは「大町 百瀬慎太郎氏報」と記された文章が掲載され、見出しには「大町登山案内者組合」とある。

それによると、この年(大正七年)と思われるのは八月二十四日に山仕舞いの慰勞会を兼ねた集会を行ったといひ、昨年(大正六年)は六月二十日に山開きの集会を行ったといひ、このことから当時、年間における組合の実質的な活動期間は二ヶ月間ほどであったと思われる。また、この年の慰勞会を兼ねた集会には十二名が出席しただけであったと伝えられる。山案内人の名前を挙げてその案内能力を記している。これらの名前によると、このときの組合加入者は、創立時(大正六年)の加入者二名から五名を除いて新たに三名を加えた二十名であったといひ。設立から一年の間でも組合の加入者の異動が少なからずあったことがうかがえる。また、当時の組合の性格については「どちらかといえば、山に通じた人間達の隣づきあい」といったものであったらしく、規約も当時の一般的な心得をいたったものであった(註1)といひ。

日本山岳会による「登山案内者手帖」製作・配布事業がその後どのようになったのかという点については、手元の資料からはうかがい知ることができなかった。この点については今後、さらに調査を要する。

## ②アルプスのガイドと手帳

前述の日本山岳会の「登山案内者手帖」について補足するために、ヨーロッパの本場アルプスにおけるガイドの誕生ならびにガイド手帳の事例について、サミュエル・ブライヴァン著「井出貴夫訳」グリンデルヴァルトの山案内人(註20)をもとに概略を確認しておきたい。なお、前述の著者は、大正十年の横有恒のアイガー東山後初登攀をガイドしたひとり、サムエル・ブライヴァントとして日本では通っている。

ヨーロッパにおいてアルプスの峰々に人々の目が向けられるようになったのはフランス革命（一七八九〜九一）のころからだといふ。一七八六年（天明六）にアルプス最高峰のモンブランに登頂したのは、スイスの自然科学者オラス・ベネディクト・ド・ソーシエルの提唱を受けたシャモニの医師ミシェル・バツカールと猟師・牧夫ジャック・バルマであった。アルプス山麓における初期のガイドも、やはり地元で猟師あるいは牧夫であった。時を経るにしたがいアルプス山麓への旅行者やアルプスの峰々への登山者が増加し、ガイドを職業とする者も増える。一方で登山者と料金やサービス面でのいざこざも増え、加えて悪質なガイドもときも現われてきた。

そうした状況に対処すべく、一八五六年（安政三）にスイス・ベルン州では「ベルン州の山案内人およびポーターのための最初の条令」が施行された。ここでは山案内人の職業を行うには登録が必要であると定め、細かな規則や規定が明記された。ここでは次のような内容も含まれたという。「その年の登録された案内人の名簿が作成される。名簿へ最初に記入された案内人は誓約をさせられる。手帳はページが打たれ、案内人条令が記入されている。紙片をひきちぎったり、虚偽の証明の記入は偽造として罰せられる。」「もし同じ年に三度悪い評判を案内人手帳に記入されると、一定期間登録をはずされる。最も厳しい罰は生涯手帳を取り上げられる。」「以上、前掲書より抜粋・引用）

すなわち、ガイドとして登録されると、その証としてガイド手帳が渡される。登山客を案内した際には、その手帳へ山行中の様子や感想のほかガイドへのお礼や評価などを客に記してもらおう。そして、手帳は群長などによって検閲されるという仕組みになっていたというのだ。これにより、ガイドの質に一定の基準を設けるとともにこれを維持し、なおかつガイド自

身にも誇りを持つて山案内をさせることに成果があったと思われる。

日本山岳会の「登山案内者手帖」製作・配布事業は、こうしたスイスでの事例を念頭においてのものであったと推測される。

③ 創立時の組織

設立当時の大町登山案内者組合の組織は次のようなものであった。

- ・事務所：対山館。これは便宜上、あくまで旅館としてではなく百瀬慎太郎方の自宅として対山館に設置した。<sup>〔註17, 18〕</sup>
- ・主任：百瀬慎太郎。設立当初、組合長という名称は用いず、すべての事務処理を行う主任の役を付けていた。<sup>〔註17, 18〕</sup>
- ・相談役：大西又吉、伊藤菊十、勝野玉作、伝刀刀藏。主任とともに事務処理を行うものとして、山案内人の年功者から慎太郎が四名を選出した。<sup>〔註17, 18〕</sup>
- ・加入者：設立時は二名の加入者であった。経験のある山案内人を先達、見習い中の者を強力とし、賃金の面からも両者を区別した<sup>〔註17〕</sup>。また、慎太郎は「尚組合に加入せざる者は臨時備入人夫として総数凡七十名位の募集は出来候」とも述べている<sup>〔註19〕</sup>。

結成時の組合加入者の所在地についてみると、大町一四名、平三名、美麻一名、五名は未記載であった<sup>〔註18〕</sup>。大町在住者がほとんどを占めているが、これに関して慎太郎は次のように述べている。「兵三郎も使ひ様ではない、人夫ですが今年春から岩茸取りに専門で案内を辞しました。また野口邊に多少ある様ですが今迄大出邊まで自転車をとほでたりしてゐたが出来るなら近い町の中に見付けたいので今では殆んど町の者ばかりです<sup>〔註16〕</sup>。兵三郎というのは遠山品右衛門の二男のことで、平村野口大出（現大町市平）に住んでいた。品右衛門にはほかに長男の作十郎と三男の富士弥という息子がいた<sup>〔註21〕</sup>。慎太郎は単

に大町在住者だけではなく、大町周辺の平村や常盤村（現大町市常盤）やそのほか地籍を問わず加入者を募りたいとしている。このことについて「名目が大町登山案内組合といふので、野口邊のある一部の者から部落的感情を以て誤解されましたが、自ら分門する事と思ひます」と慎太郎は述べ、さらに組合の相談役についても「四人共大町在住の者ですが一人野口村から一人を挙げた方がいゝと思つてをります」と野口村在住者に対して配慮をみせている<sup>〔註18〕</sup>。これは野口大出の猟師たちの案内能力を慎太郎が高く評価していたことの表れではないだろうか。同時に、大出という集落が麓川や高瀬川筋から大町へいたる中継点として素通りできない要所であったことも大いに注目したい。

3. 山案内人の仕事

山案内人の一番の仕事は、登山者の希望に沿った山行を安全・確実に先導することにある。また、初期の山案内人は客の荷物を一部背負う歩荷の役割も兼ねていて、山行中の一切の露営（野営・野宿）や食事の世話もした。露営の最も簡単な方法は、焚き火の近くで着莫座（こざ）にぐるまりながらのゴロ寝や「小屋掛け」といって、現地調達した材料を使って仮の小屋を急ごしらえで作る、その中で寝ることであった。小屋といつても夜露がしのげるだけのごく簡単なもので、周囲から切り出した木材を組んだ上に枝葉や樹皮をのせたり、または持参した油紙や渋紙を屋根の代わりとして掛けたりしただけの造りであった。国内では明治末期から多角錐形のテント（天幕）が登山に使用されていたようで、テントを携行した山行の場合、登山客はテント内に泊まった。一方、登山客に雇われた山案内人たちは、前述のような方法によってテントわきで夜を明かすことが多かったようである。

このほかにも、猟師などが山中の生活に古くから利用していた岩小屋や簡易な造りの作業小屋に宿をとった様子が、当時の写真や登山記の記録からうか

がえる。また、登山客から指名を受けるような山案内人は、料理上手はもちろん、露営の焚き火や小屋の囲炉裏を囲んだ「夜の話」が得意なことも人気の一要素であったといふ<sup>〔註3〕</sup>。

(1) 明治末の夏山登山の装備・食糧（一例）

次にあげたのは、明治末の東京からの日本アルプス夏山登山者が持参した装備・食糧などの荷物の一例で、現地調達品も含む。これら「衣食住」面を通して、当時の山での生活が想像できる。

- 〔衣〕ルツザック・肩掛け鞆・草履（一日一足が基本）・雨具として着莫座・越前莫座と油紙・脚半・カナカシキ（雪渓下降時使用）メリヤスのシヤツとスボン・夏用洋服・和服・鳥打帽・股引・手拭
- 〔食〕米・味噌（なるべく辛いもの）・醬油・エス・酸節・梅干・干瓢・椎茸・白子干・桜蝦・葱・馬鈴薯・味付海苔・ワカメ・パン・焼麩・砂糖・スターチ・ビスケット・果物・缶詰・甘酒やお多福豆の缶詰・ウイスキー小瓶・ナイフ・フォーク・匙・缶切り・飯盒・小鍋・燃料として生のパイプ・イワナ・筒アザミ類・シタ類の若菜・イワナズメ地衣の一種の澄まし汁・ウツの味噌汁・岳嶽の味噌汁・アザミの味噌汁
- 〔住〕テント（片桐特注の二・三人用）テント代用の油紙（四畳半）・仙花紙を糊糊でつき、亜麻仁のボイル油を塗ったもの・毛布・提灯（蠟燭）・西洋蠟燭・アセチレン灯・火繩・マチ・小刀・針金・糸・紙・鉛筆・万年筆・小楊枝・歯磨・石鹸・薬品数種・捕虫網

以上の品物などからなる登山客の荷物が約四貫（約一五kg）<sup>〔註22〕</sup>

(2) 案内料

初期の大町登山案内者組合における案内料の推移は別表のとおりである。

設立当初、ひと夏にひとりの山案内人が案内するのは三組もしくは四組にすぎなかった<sup>〔註23〕</sup>が、大正から昭和初期ころ、山案内人の日当はおおよそ里の日当の二・三倍であったという<sup>〔註28〕</sup>。また、設立時の案内料について賃金は一日「先達（案内人）一円十銭、強力九十銭」となっているが、当時の物価が米一

升およそ三十銭といわれるから、決して安くはない」  
 「証1」の考えも述べられており、山案内は夏の二ヶ月ほどでまとまった現金収入を得られる仕事であった。しかし、金銭面からのみ、その仕事をしていいたのではなく、やはり山が好きという気持ちを持った者でないと山案内人は長く勤まらなかつたようである。

表、初期の大町登山案内者組合における案内料の推移

年 代	案内料	備 考	註
大正6年(1917)	1円10銭	先達1円10銭、強力90銭	17
昭和3(1927)	2円		2
昭和7年(1932)	2円	テント50銭増	23
昭和9年(1934)	2円	キャンプ50銭増	23
昭和10年(1935)	2円	キャンプ50銭増	24
昭和11年(1936)	2円	キャンプ50銭増	25
昭和14年(1939)	2円50銭		2
昭和18年(1943)	3.5円	自炊・キャンプ4円 季節外4.5円	26
昭和24年(1949)	200円		2
昭和26年(1951)	350円	キャンプ自炊の場合は400円 特別の場合は2割増	27
昭和27年(1952)	400円	主食案内人持ち キャンプ自炊・特別の場合は500円	27
昭和32年(1957)	500円		2
昭和33年(1958)	600円		2
昭和35年(1960)	700円		2
昭和36年(1961)	850円		2
昭和37年(1962)	1,000円		2
昭和38年(1963)	1,500円		2

#### 4. 山案内人の横顔

大町登山案内者組合結成時の主な山案内人たちについて、彼らを評した形容を拾い集めたのでご紹介する。

- ・伊藤菊十：「大町の案内人としての元祖」【註19】「狷夫育ちとして数十年山に経験有」【註19】
- ・大西又吉：「大町の案内人としての元祖」【註20】「大町に於ける一流」【註19】「山」の「勘」のよい事は第一位です。体格はもと土地の村相撲の大関で大砲の様な面つきです」【註18】
- ・勝野玉作：「大町の案内人としての元祖」【註20】「大町に於ける一流」【註19】「精悍」【註19】「慍慍」という方です。強情で進んで帰ることを知らぬという勇者です」【註18】
- ・伝刀林蔵：「大町の案内人としての元祖」【註20】「大町に於ける一流」【註19】「沈着」【註19】「比較的思慮深く

落付きがあります」【註18】「極度の慎重さと強い責任感」【註30】

- ・黒岩直吉：「大町に於ける一流」【註19】「將來ある」【註18】
- ・佐藤静馬：「大町に於ける一流」【註19】「徹頭徹尾忠実にして剛力」【註19】
- ・松沢由蔵：「準一流」【註19】「其無邪気と元氣は雇傭者に快感を与ふべしと想像致候」【註19】

このほか戦後活躍した主な山案内人たちは大和由松、桜井一雄、平林高吉、勝山佐久衛、桜井親次らが知られている。

まとめにかえて  
 今回、大町登山案内者組合設立前後の様子について文献を中心に探った。同時に、組合設立時に加入者として名を連ねた大町の山案内人二名の関係者から聞き取りを行うためにその所在を調べた。結果、二名の加入者のうちわずか三名ではあるが、子や孫にあたる家族が判明し、聞き取りを行うことができた。その詳細については、また機会があればご紹介したいと思う。

本稿をまとめる中で、調べ足りない部分や新たに調べるべき事柄について再確認する結果となり、現段階ではまとめざるに至っていない。今後の課題として、次の点を探っていく。ひとつは、残る創立当時の山案内人たちの関係者の所在。ご家族からの聞き取りを行うことで、明治・大正・昭和初期ころ、北アルプス山麓に生きたひとりの人物としてのライフストーリー(生活史)を記録に残しておきたい。もうひとつは、大町以外の北アルプスの各登山口(鳥川・有明・白馬・鳥ヶ・中房など)での山案内人組合結成の経緯。さらに、山案内人の登録制度や試験に関する現在までの流れと山案内人から近代ガイド化への変遷。冬期登山や岩壁登攀の技術・知識を持った山案内人を欲するようになった時代になると、大和由松や桜井一雄といった大町の山案内人や上条孫人など島々

の山案内人、さらには富山の山案内人などが活躍する。大正後期・昭和初期から戦後にかけての学生山岳部による登山や海外遠征などへ同行したこうした山案内人たちと、いわゆるアルビニズムとの関わりについても調べたい。

いずれにしても、日本の登山史の流れにおける山案内人やその組合についての意味合いをより大きな視点からとらえる必要がある。そのためにも個々の詳細な事例を積み重ねていくことが重要で、全体像をとらえる上で欠くことができないと考える。

(大町山岳博物館学芸員)

(おわり)

- 【註14】山岳第1年2号(山岳会、一九〇六)
- 【註15】山岳第10年1号(日本山岳会、一九一五)
- 【註16】山岳第10号2号(日本山岳会、一九一五)
- 【註17】山岳第12年1号(日本山岳会、一九一八)
- 【註18】山岳第13年1号(日本山岳会、一九一八)
- 【註19】山岳第13年2号(日本山岳会、一九一九)
- 【註20】サミュエル・ヴァン著・井出貴夫訳「アリンデル」
- 【註21】向山雅重著「遠山品石衛門翁遺品」山と博物館第6巻1号(大町山岳博物館、一九六二)
- 【註22】註4より、田部重治が行った明治三十八年(一九〇五)日本アルプス夏山縦走と明治四三年白馬岳登山の記述から拾った。
- 【註23】山日記(日本山岳会、一九一七)
- 【註24】山日記(日本山岳会、一九一八)
- 【註25】山日記(日本山岳会、一九一九)
- 【註26】山日記(日本山岳会、一九四三)
- 【註27】昭和二六(一九六一)と二七(一九四二)年の「案内人料金表」(大町山岳博物館所蔵資料より)
- 【註28】「有明登山案内人組合八十年記念誌 岳の道標」(有明登山案内人組合、二〇〇二)
- 【註29】百瀬慎太郎遺稿集刊行会編「山を想へば」(百瀬美和、一九六二)収録
- 【註30】大島堅造著「わが山のガイド」(日本経済新聞、一九六三、二一〇)

- 【参考文献】
- ・フューラー座談会「山と旅」第104号(J.C.C.、一九三二)
- ・「案内人 山と遭難座談会」(文藝春秋、オール讀物)8月号(文藝春秋、一九三五)
- ・百瀬慎太郎遺稿集刊行会編「山を想へば」(百瀬美和、一九六二)
- ・ウオルター・ウェストン著・岡村精一訳「日本アルプス登山と探検」(角川書店、一九六三)
- ・岩間正夫編「世界山岳百科事典」(山と溪谷社、一九七二)

高須茂著「山のガイドたち」(山と博物館)第7巻8号(大町山岳博物館、一九七二)

平林武夫先生遺稿集刊行会編「残雪」(信濃教育会出版部、一九七九)

中村周一郎著「北アルプス開発誌」(郷土出版社、一九八二)

大町市史編纂委員会編「大町市史」第5巻民俗・観光(大町市、一九八四)

岡澤祐吉著「スイス山案内人の手帳より」(ベースボールマガジン社、一九八七)

柳原修一著「北アルプス山小屋物語」(東京新聞出版局、一九九〇)

秋山高志ほか編「図録 山漁村生活史事典」(柏書房、一九九二)

石原きくよ著「山を想へば人恋し」(郷土出版社、一九九三)

はまみつお著「黎明の北アルプス」(郷土出版社、一九九四)

大塚民俗学会編「日本民俗事典」(弘文堂、一九九四)

#### 資料の寄贈ありがたいがむらじま

当博物館の収蔵資料充実のため、平成十五年度あらたに次の資料を寄贈いただきました。心より厚くお礼申しあげます。

- 書籍12点……… 神奈川県横浜 横山 駒子氏
- 書籍1点……… 大町市 渡邊トシ子氏
- 書籍1点……… 北安曇郡池田町 菅原 悦子氏
- キノコのスライド原簿73点……… 大町市 成川 実氏
- 書籍25点……… 大町市 北沢 勝二氏
- 書籍2点……… 千葉県習志野市 増田 欣子氏
- 足立源一郎使用の尻皮1点……… 神奈川県平塚市 足立 朗氏
- 1階展示ケースおよび3階リニューアル一式……… 東京都八王子市 八王子岳友会
- 山岳書籍など118点……… 埼玉県桶川市 関根 武夫氏
- 高周波ビッケル1点、山内ビッケル1点……… 東京都千代田区 橋本龍太郎氏

(大町山岳博物館)

**山と博物館 第49巻第4号**  
 二〇〇四年四月二十五日発行

発行 千代田長野県大町市大字大町八〇五六一  
 市立大町山岳博物館

TEL 〇二六 一三二 〇二二  
 FAX 〇二六 一三二 〇二二  
 E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp  
 URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 株式会社印刷  
 定価 年額 一、五〇〇円(送料共) (切手不可)  
 郵便振替口座番号 〇〇五四 〇一七 一三二九三